慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査 |
| Sub Title | Archaeological Excavations at Tel `En Gev, Israel, 2009 : Preliminary Report |
| Author | 杉本, 智俊(Sugimoto, David T.)<br>間舎, 裕生(Kansha, Hiroo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 2010 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.79, No.1/2 (2010. 3) ,p.87- 114 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100300-0087 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査

杉本智俊
間舎裕生

## 一、はじめに

慶應義塾大学イスラエル考古学調査団（団長　杉本智俊）は、二〇〇九年八月三日から二八日まで、イスラエル国エン・ゲヴ遺跡において考古学的発掘調査を行った。本報告は、慶應義塾大学次世代プロジェクト推進プログラム及び文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）による成果の一部である。

エン・ゲヴ遺跡は、イスラエル国北部のガリラヤ湖東岸に位置する遺跡である（図1）。現在遺跡はキブツ・エン・ゲヴの中に存在する。遺跡の最頂部は周囲よりも五メートルほど隆起しており、平らなテルを形成している。テルは南北約二四〇メートル、東西約一二〇メートルあり、この地域の鉄器時代の遺跡としては比較的大規模なものである。[1] 遺跡は北部が一段高くなっており、後述するようにその部分が「上の町」を形成していたものと思われる。

エン・ゲヴ遺跡の位置するガリラヤ湖東岸地域は、ヘブル語聖書で「ゲシュル」と呼ばれている。旧約聖書サムエル記下三・三によると、イスラエル統一王国初代の王ダビデはゲシュル王の娘と結婚し、アブシャロムという息子を得たことが記されている。このアブシャロムは、後に父ダビデに反乱を起こしている（サムエル記下一三―一九章）。その後、この地ではアラムとイスラエルの間に数度の戦いが起こったことが記されており（列王記上二〇章および列王記下一三章）、その際アラム軍の拠

図1　エン・ゲヴ遺跡の位置
（月本他 2009　図 1.3）



点となったアフェクという城壁のある町がエン・ゲヴである可能性も指摘されてきた。[2] したがって、エン・ゲヴ遺跡の発掘は、古代イスラエル王国と近隣諸国との関係を知る上で鍵となる調査である。

## 二、これまでの調査と二〇〇九年度の調査

エン・ゲヴ遺跡の発掘調査は、まず一九六一年にB・マザールらによって行われた（*Mazar et al.* 1964）。この際には、テルの西側と南側の縁に沿って五つの試掘溝（A～E地区）が設けられた。この調査はわずか一一日間しか行われなかったが、これによって鉄器時代の町は周囲を城壁によって囲まれていたことが明らかとなった。また、上の町では鉄器時代だけで四層、下の町では五層が確認され、暫定的な編年案も示されている。第Ⅲ層からはアラム語の銘文の刻まれた土器が出土しており、遅くともこの時期までにここにアラム人が居住していた可能性が指摘されている。

一九九〇年から二〇〇四年までは、日本の複数の大学（天理大学、立教大学、東京大学、慶應義塾大学など）の協力による発掘調査が十季にわたって行われた（月本他　二〇〇九参照）。調査区は、より広い範囲を発掘す

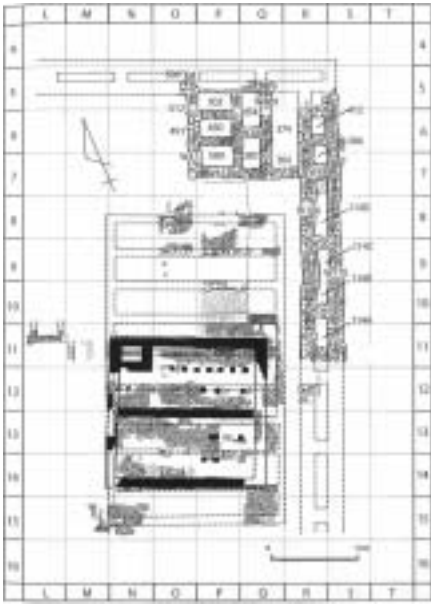


図２　Ｆ地区出土の遺構
（月本他 2009　図 2.3）

ることを狙いとして、上の町の北東部に集中的に設けられた（Ｆ地区）。この調査によって、テルの東側を直線状に南北に走るケースメート式城壁と列柱式建物の存在が明らかとなった（図２）。列柱式建物は倉庫等交易と関係する公共建造物だったと考えられている。[3]

これらの調査はガリラヤ湖東岸地域の歴史解明に貴重な資料を提供してきたが、まだ課題も残されている。マザールらの調査では鉄器時代の城壁の存在は明らかになったものの、極めて限定された調査区を短期間調査したにすぎず、古代のエン・ゲヴの全体像を把握できるものとなっていない。また、確認された五つの層位を歴史編年や旧約聖書の記述に単純に結びつけているため、慎重に検証する必要がある。[4] 日本の合同調査隊に関しては、広範な地区を調査し大規模な建物が出土しているが、おそらくこれらは産業施設であり、町の性格をより顕著に示す城門や宮殿、神殿などの遺構は出土していない。ケースメート式城壁に関しても、それがテル北部の一段高くなった部分を囲み「上の町」を形成するのか、それとも南に延びてテル全体を囲むのかはわかっていない。場合によっては、「上の町」の壁の外側にさらに外周壁があった可能性もあり、町全体の構造は明らかになってい

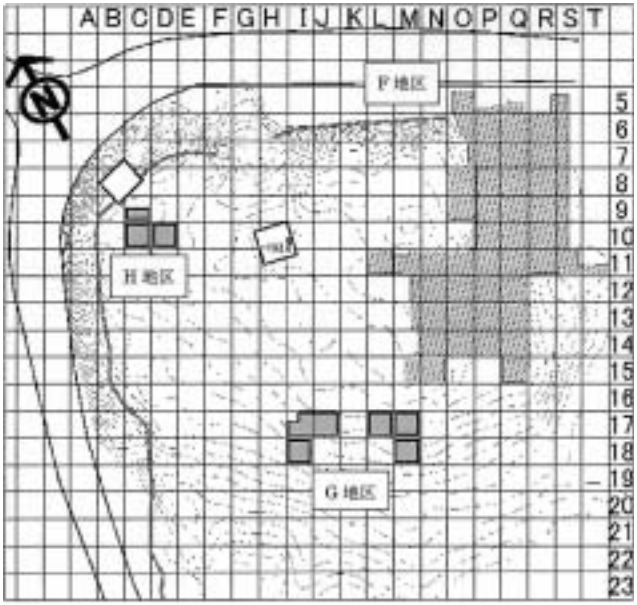



図３　2009年度発掘調査区

ない。

こうしたことから、二〇〇九年度の発掘調査では各時代の町の構造を解明することを目的に、上の町と下の町の境界部と上の町頂上部に調査区を設定することにした。調査の際には地形図を新たに作製し、二〇〇四年までに日本隊が使用していたグリッド・システムを調整して用いた（図３）[5]。

今年度の調査団の構成は、

団長・杉本智俊（慶應義塾大学文学部）

スーパーヴァイザー・高井啓介（慶應義塾大学言語文化研究所）、藤山龍造（明治大学）、高田学（開智学園）、イド・ヴァクテル（ヘブル大学修士課程）

レジストラー・間舎裕生（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）

遺構実測・渡部展也（中部大学）、江添誠（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）

遺物実測・高田史穂（開智学園）、落合友子（慶應義塾大学文学研究科前期博士課程卒業生）

マネージャー・岡田真弓（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）

であり、この他に地理班として松原彰子（慶應義塾大学経済学部）、渡部展也（兼任）、文献史学班として高井啓介（兼任）、遺跡保存・公園化立案班として松原弘典（慶應義塾大学環境情報学部）、河合雄介（慶應義塾大学政策メディア研究科前期博士課程）、パブリック考古学班として岡田真弓（兼任）がそれぞれの調査活動を行った。またイド・ヴァクテルはイスラエル側リエゾン、岡田真弓はスーパーヴァイザーの補助も行った。この他、慶應義塾大学の在学生、ヘブル大学の卒業生を中心に学生ヴォランティアの参加協力を得、ドゥルーズ族の労働者に実際の発掘作業を手伝ってもらった。

## 三、G地区

G地区は上の町と下の町の境界にあたると考えられるスロープの上に設定され、計六グリッドで発掘調査が行われた。東側部分（L/M-17/18）と西側部分（J/I-17/18）では、大きく様相が異なっている。

まず東側部分（図4、表1）では、L17グリッドとM17グリッド（以下、グリッドは省略）で東西に走る大きな壁（W105＋W123）が検出された（写真1）[6]。L17では地表の下約四〇センチからレンガ質（テラ・ピゼ）

写真1　L17で検出された壁

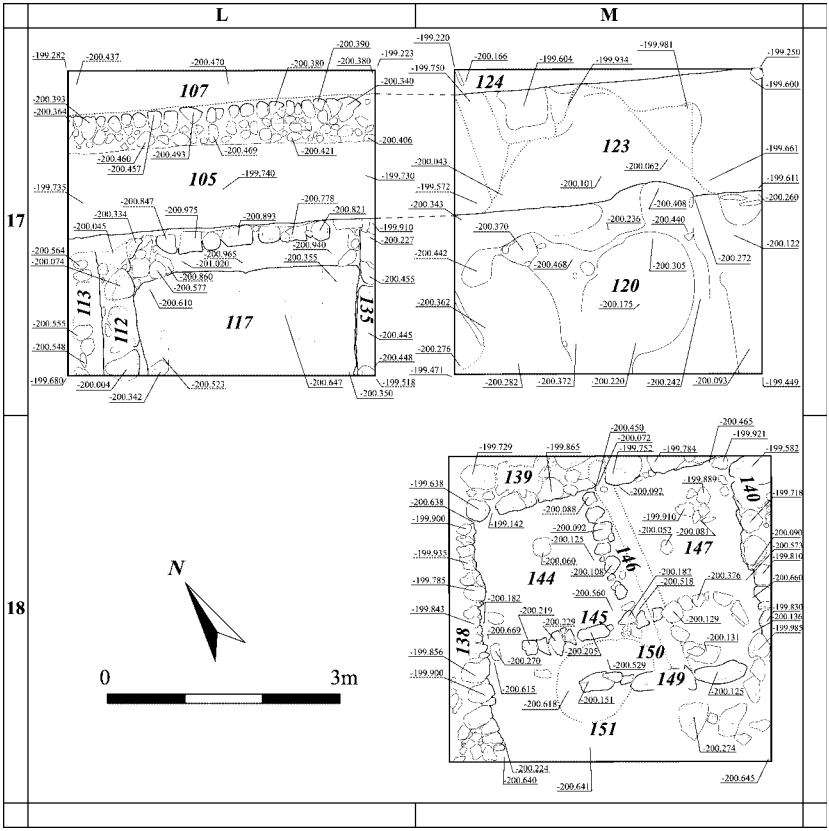



図4　G地区東側部分のプラン

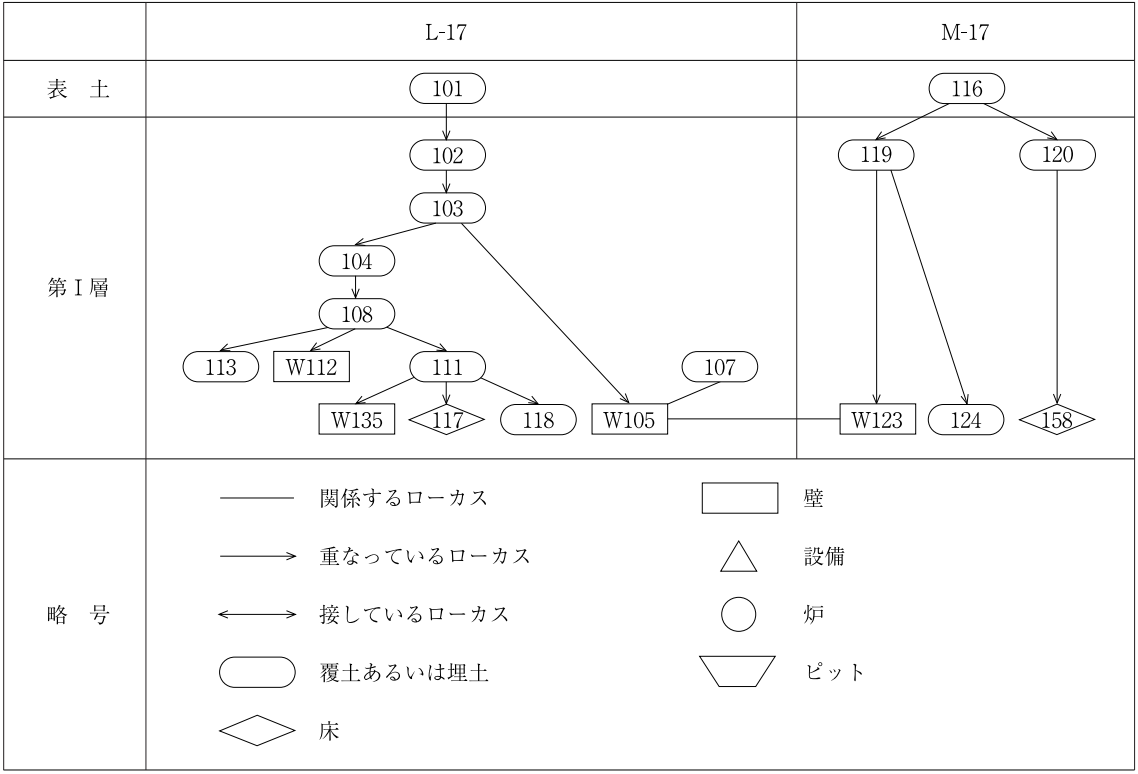



表1　L/M-17　ローカスの相互関係

の壁（W105）が出土し、その両側に漆喰が塗られている状態が確認された[7]。また、石積みの基礎部の最下段は、少なくとも南側で石一列分（約二〇センチ）テラ・ピゼの上部構造よりも張り出して造られていたことが明らかとなった。

W105の南側では、四〇センチほど床も土器も出土しない層が続いた後（L111, L115）、非常に固くぶ厚い（厚さ一〇センチ程度）漆喰敷の床が検出された（L117）。東西幅は約三〇〇センチ、南北幅は南端がグリッド南面の畔に入り込んでいるため正確にはわからないが、少なくとも一五〇センチ以上あった。この漆喰は石かと思われるほど硬化しており、表面はスムーズである。漆喰の床と平行した壁の間には約六〇センチの土の部分（L118）があった。L118と同質の土はレンガの下にも続いていたが、上面はL117及び石積みの基礎の上面とほぼ同じレベル（マイナス二〇〇・六〇メートル）なので、L117と同一の床面を形成していたと考えてよいであろう。なお、L117の上層からは復元可能なものを含む、大量の土器片が出土している（図5）。

また、L117の東からは、W105に接するようにグリッドの東面を南北に走る切石の列（W135）が確認された。L117の西からもグリッドの南西部を南北方向に走り、W105に取りつくW112が検出された。この壁も漆喰で覆われているが、石列は一列、一段のみしか残っておらず、土器等の遺物もほとんど出土しなかった。このためW105とW112との関係は不明である。

このグリッド全体を横切る壁（W105）の幅は約一五〇センチであり、テル東端のケースメート式城壁の幅とほぼ等しい（桑原　二〇〇九、一三）。二〇〇四年までの調査においてケースメート式城壁の角は未だ確認できておらず、課題となっていたが、この壁の存在によって上の町が矩形に囲まれた行政区を形成していたことがほぼ確実となった。南北の壁と東西の壁の交点はR/S17グリッドあたりに位置すると推定されるが、南北の壁が更に南に続いて下の町を囲っていたのかどうかは未だ不明である。この点は今後磁気探査等を用いて明らかにする予定である。

W105の連続と考えられる壁は東隣のM17でも検出された（W123、写真2）。幅はW105と同じ約一五〇センチであるが、グリッドの中央部がもろくなっており、火によって破壊されたことを示している。壁の南側（L122）に溶けた漆喰が平らに堆積しており、M17と同様

写真２　L17 と M17 を貫通する壁

の漆喰の床が熱によって形状変化を起こしたように見える。直上には灰や赤く焼けたレンガが一面に堆積していた。出土した土器は、鉄器時代ⅡB期（前八世紀）のものである。後の時代による居住の跡がないことから、これは最終的な破壊の痕跡と考えられる。

M17 の南の M18 では、表土の約六〇センチ下からしっかりとした造りの壁（W138, W139, W140）で囲まれた矩形の建物が検出された（写真3、表2）。内部は更に細い壁（W145, W146）によって二つの小さな部屋（L144, L147）に分割されており、それぞれの床は漆喰で覆われていた。また、グリッドの南側からも漆喰に覆われた細長い遺構（W149, L150, L151）が検出された。この遺構の用途は不明であるが、幅の狭さと漆喰から考えて、液体と関係する遺構かもしれない。

この建物の年代は、共伴する土器から判断するとヘレニズム時代だと考えられる。後述するH地区の遺構とともに、ヘレニズム時代のエン・ゲヴにこれまでの調査で確認できた以上に強固な建物があったことを示している。この時代の遺構は、少なくとも上の町全域に広がっていた可能性が高い。[8]

G地区西側の I17/18、J17 では、直交する東西方向の

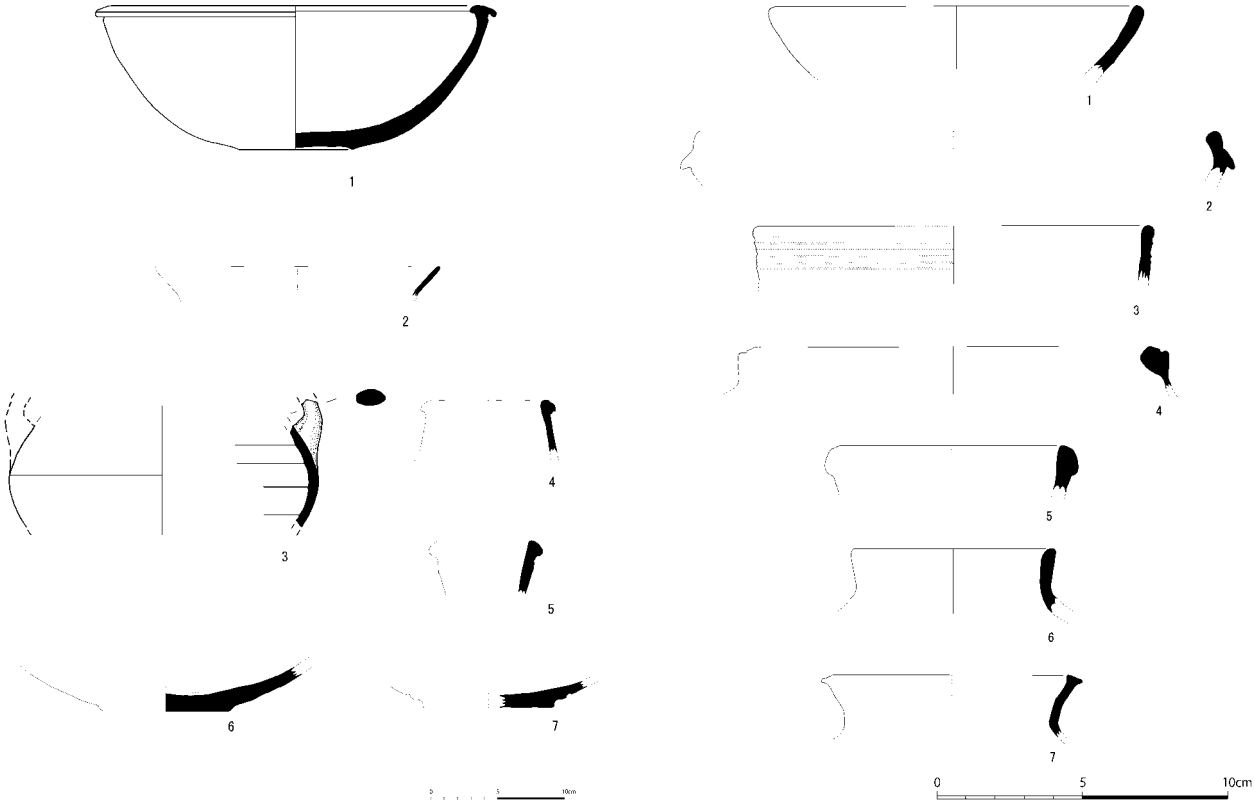



図 5　G 地区漆喰の床上層の土器（図 5-1[左]：L111；図 5-2[右]：L114）

図 5-1　G 地区漆喰の床上層の土器(L111)

| 番号 | ローカス番号 | バスケット番号 | 器種 | 色調 | | | 釉薬 | 胎土 | 粒子 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 内側 | 外側 | 断面 | | | | | |
| 1 | 111 | 1012 | 鉢 | 2.5YR7/4 | 5YR7/4 | 5YR7/4 | | 普通 | 最大 2mm 大の白色、灰色粒子 | 普通 | |
| 2 | 111 | 1016-4 | 鉢 | 2.5YR6/4 | 2.5YR6/6 | 7.5YR7/3 | | 極めて密 | 白色粒子 | 良好 | 外側全面に磨き |
| 3 | 111 | 1016-1 | 調理鍋 | | | | | やや粗い | 白色粒子 | 普通 | |
| 4 | 111 | 1016-3 | 貯蔵壺 | 10YR6/3 | 5YR6/6 | 10YR7/3 | | やや粗い | 白色・黒色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 5 | 111 | 1014 | 水差し | 5YR7/4 | 5YR6/4 | 5YR7/6 | | 普通 | 微細な白色粒子 | 良好 | |
| 6 | 111 | 1016 | 鉢 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | 内側全面 2.5YR5/5 | 普通 | 白色・灰色粒子 | 良好 | |
| 7 | 111 | 1016-2 | 鉢 | 7.5YR6/4 | 7.5YR6/4 | 10YR6/2 | | やや密 | 白色・褐色粒子 | 普通 | |

図 5-2　レンガ敷き上層の土器(L114)

| 番号 | ローカス番号 | バスケット番号 | 器種 | 色調 | | | 釉薬 | 胎土 | 粒子 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 内側 | 外側 | 断面 | | | | | |
| 1 | 114 | 1039-2 | 鉢 | 5YR7/6 | 5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | かなり密 | 砂粒を多く含む。1-2mm 大の黒色灰色・褐色・白色の粒子が多い | 良好 | |
| 2 | 114 | 1034-1 | 鉢 | 5YR4/6 | 5YR5/4 | 5YR4/6 | | 黒色の核あり (7.5YR1.7/1) | 白色粒子 | 普通 | |
| 3 | 114 | 1039-1 | 鉢 | 10YR7/4 | | 10YR7/2 | 外面 7.5YR4/4 | やや密 | 1-2mm 大の白色・灰色粒子、白色・黒色の小さな粒子 | 良好 | |
| 4 | 114 | 1017 | 調理鍋 | 5YR4/4 | 2.5YR4/6 | 2.5YR4/6 | | | 白色粒子とやや大きめの砂粒を多く含む | 普通 | |
| 5 | 114 | 1034-2 | 貯蔵壺 | 5YR6/4 | 5YR6/4 | 5YR6/4 | | 普通 | 白色粒子 | 良好 | |
| 6 | 114 | 1032 | 貯蔵壺 | 5YR7/6 | 5YR7/6 | 5YR6/4 | | やや粗い | 1mm 大の褐色粒子 | 普通 | |
| 7 | 114 | 1031 | 貯蔵壺 | 2.5YR5/8 | 5YR4/2 | 2.5YR5/8 | | 普通 | 白色粒子 | 良好 | 内側上端 5YR4/3 ヘレニズム時代からの混入？ |

写真３　M18で検出されたヘレニズム時代の建築



壁（W126＋W129）と南北方向の壁（W128＋W154）が検出された（図6）。これらの壁はいずれも幅約七〇センチであるが、東西の壁の石組みが三～四段程度あるのに対し、南北の壁は一段しか残っていない。このことから両者が同じ時代の一つの建物を形成していたかどうかはわからない。出土土器はヘレニズム時代と鉄器時代が混在したものであり、表土に近いので、あまり参考にならない。I17の南東側（L130）とJ17の東半分（L114）は、現代の大規模な軍事作業のため遺構が破壊されている。I17のW126の石は、同じ壁の他の部分に比べて大きな石（約四〇センチ×六〇センチ）を使用している。このことから、W126は東西方向の壁の角かもしれない。また、撹乱部分には長さ六〇センチ程度の大きな石が多数混じっており、地形や遺跡内の位置からも、ここに矩形の行政区（上の町）に入る門があった可能性が考えられる。しかし、現状では、これ以上の解釈は困難である。

## 四、H地区（表3）

H地区は遺跡内で標高の最も高い地点に設定され、三つのグリッド（C9, C10, D10）で調査が行われた。この地区では大きく三つの層が確認できたので、層位ごとに

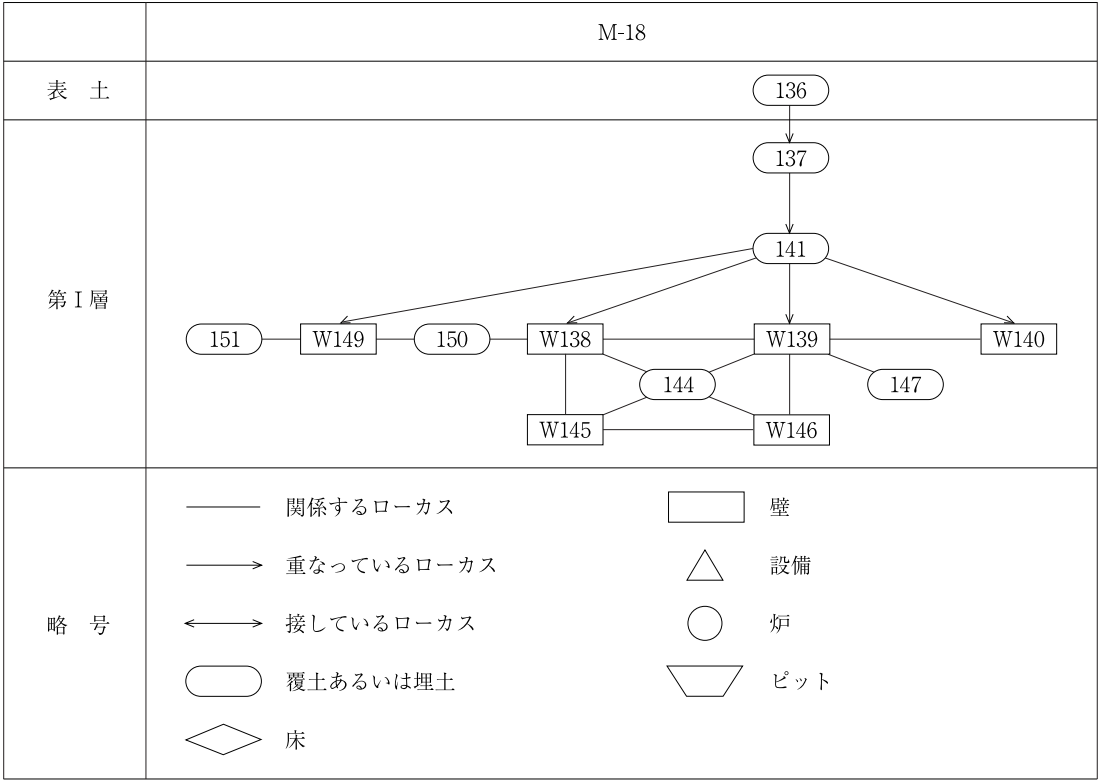



表2　M-18　ローカスの相互関係

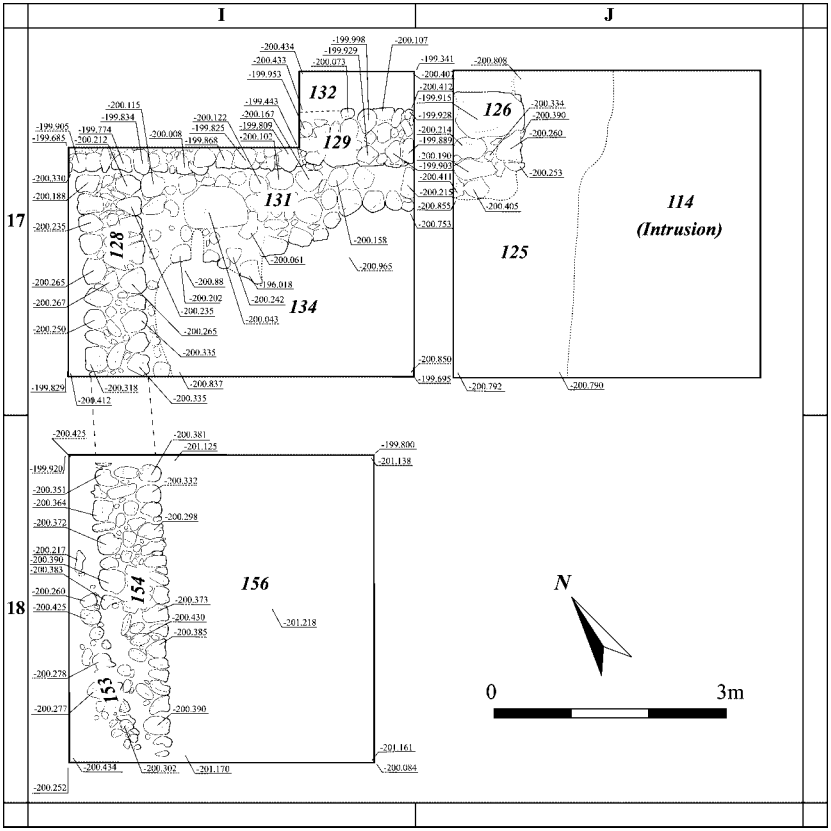



図６　Ｇ地区西側部分のプラン

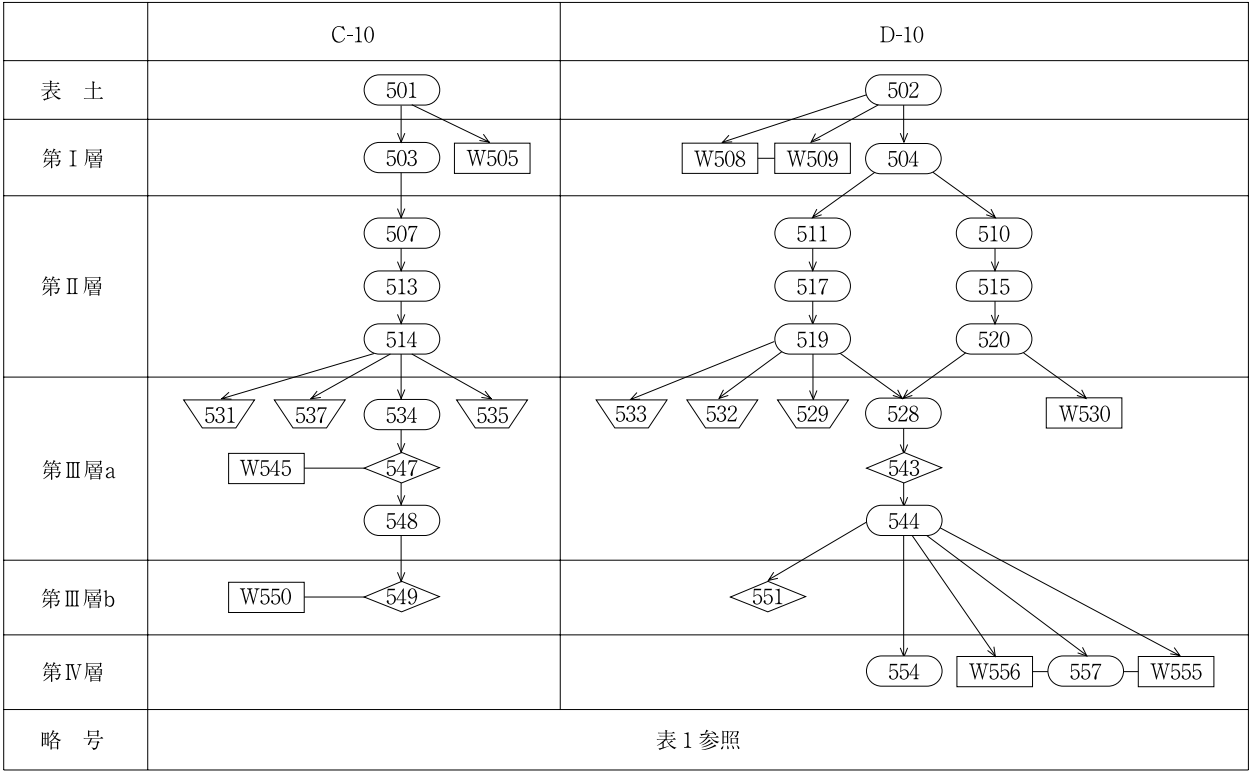



表３　C/D-10　ローカスの相互関係

報告する。

第Ⅰ層（図7）

C9/10では、地表下二〇センチほどから大きな建物の角と思われる遺構が検出された（W505, W516）。四〇センチ角ほどの大きな石を使用しているが、石は一段しか残っておらず、それに取りつく床も確認することができなかった。この遺構は共伴土器からヘレニズム時代のものと考えられ、テルの北西端に位置する塔のような大型建築であったと思われる。

D10においても矩形の二つの壁（W508, W509）がW505とほぼ同じレベルから検出された。一段のみの石列から成り、取りつく床が確認できなかった点も同様である。しかし、東西方向の壁（W508）はその西端でW505によって切られているので、これらが同時代とは考えられない。[9] ヘレニズム時代のエン・ゲヴには、二つ以上の層があったと考えるべきであろう。

第Ⅱ層

ヘレニズム時代の遺構の下からは、C10・D10両グリッドのほぼ全面を覆う上質の漆喰敷の床（L543, L547、

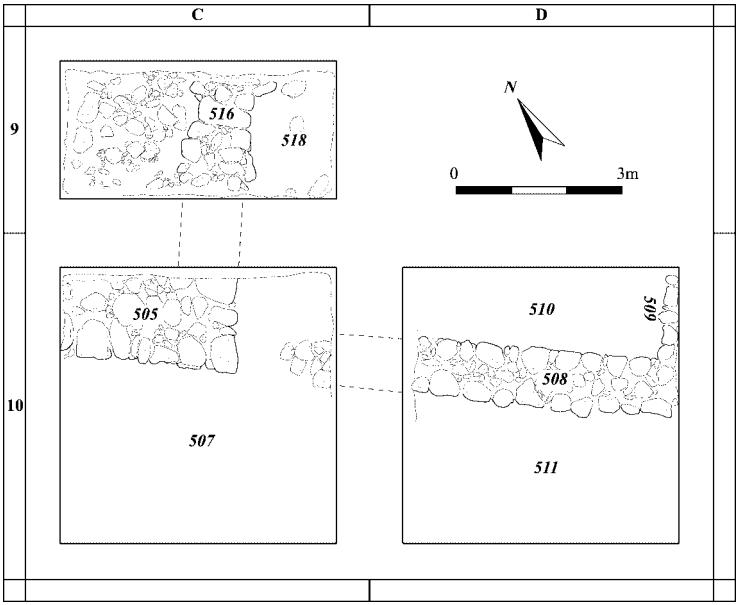
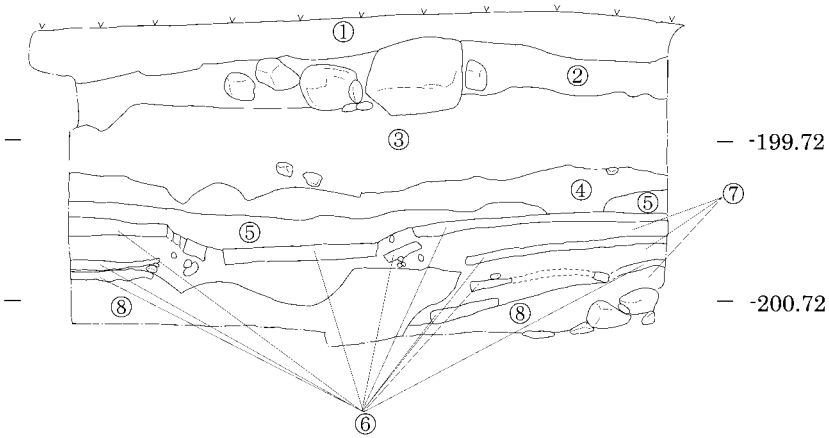



図7　H地区ヘレニズム時代のプラン

写真 4　H 地区で検出された漆喰の床　（図 4-1［上］：C10；図 4-2［下］：D10）

写真５　漆喰の床の断面（C10 北側）




①表土　②黒っぽいやわらかい土　③白っぽいやわらかい土
④黒っぽいやわらかい土　⑤赤茶色の崩れたレンガ　⑥漆喰
⑦小さな砂利を大量に含む茶色の土　⑧赤茶色の土

図８　C10 北側の断面図

写真4、5、図8）が検出された。ヘレニズム時代の遺構からこの床までの間には約九〇センチの覆土の層があり、暗褐色・明灰色・明褐色・明灰色と土色が変化している。これらは後の時代に造られた多くのピットや墓によって攪乱されていたが、復元可能な土器片も多数出土している。

漆喰の床は後代のピットによって部分的に破壊されているものの、五～一〇センチの厚さの上質のものである。また、C10西側では、同様の床が二枚あったことが確認されている（L547, L549）。床の下には床の基礎と思われる層が約四〇センチの厚さで堆積しており、砂利を大量に含む茶色の土と薄い漆喰の層が三段交互に重なるように造られていた。この堆積はC10の北東角でもっとも明瞭に認められる（写真6）。

C10からは途中で破壊された壁がふたつ検出された。南西端に位置するW545は先述の床L534の直下から出土したが、わずかに一メートル四方程度しか残っていない。北西端に位置するW550は上層の漆喰の床（L547）と下層の漆喰の床（L549）の間に位置する。W545同様に残りが悪く、これらの壁の機能を判断することは難しい。漆喰の床自体からはほとんど遺物は出土しなか

写真6　C10北東角で確認される漆喰の床の基礎

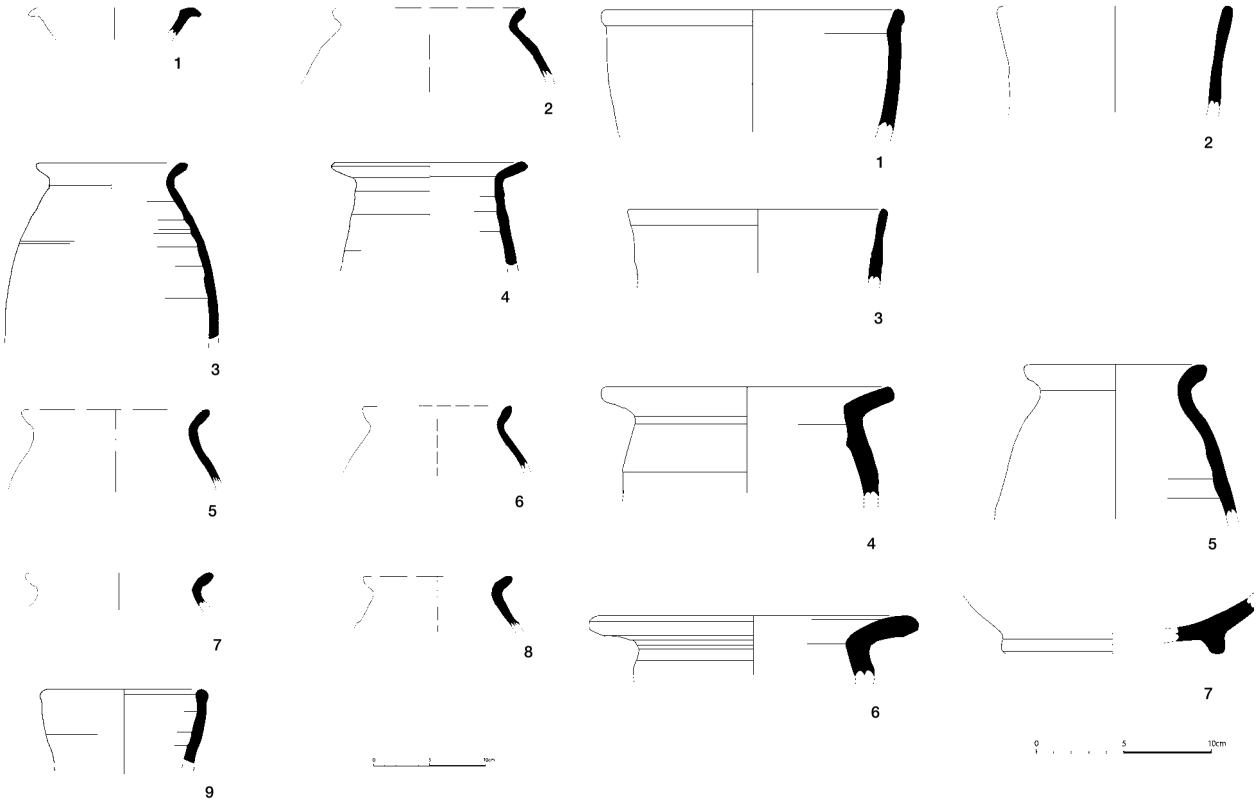



図 9　H 地区漆喰の床の上層の土器（図 9-1［左］：L536；図 9-2［右］：L534［一部］）

図 9-1　H 地区漆喰の床上層の土器(L536)

| 番号 | ローカス番号 | バスケット番号 | 器種 | 色調 | | | 釉薬 | 胎土 | 粒子 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 内側 | 外側 | 断面 | | | | | |
| 1 | 536 | 5098 | 鉢 | 5YR6/4 | 5YR7/4 | 5YR6/4 | | 混和剤あり | 2-10mm 大の白色粒子 | 良好 | |
| 2 | 536 | 5075 2 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 5YR7/4 | 7.5YR8/3 | | やや密 | 2-3mm 大の白色・黒色粒子 | 良好 | |
| 3 | 536 | 5080 1 | 貯蔵壺 | 5YR7/4 | 5YR7/4 | 5YR7/4 | | やや密、黒色の核あり | 2-3mm 大の白色・黒色粒子 | 良好 | |
| 4 | 536 | 5080 3 | 貯蔵壺 | 5YR7/4 | 5YR7/6 | 5YR7/6 | | やや密、黒色の核あり | 少量の白色・黒色微粒子 | 良好 | |
| 5 | 536 | 5075 1 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | やや密 | 白色・黒色粒子、少量の小石 | 良好 | |
| 6 | 536 | 5075 4 | 貯蔵壺 | 5YR7/4 | 5YR7/4 | 10YR7/4 | | やや密 | 少量の白色微細粒子 | 良好 | |
| 7 | 536 | 5091 1 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 5YR7/6 | 7.5YR7/7 | | やや密 | 微細黒色粒子 | 良好 | |
| 8 | 536 | 5075 3 | 貯蔵壺 | 7.5YR6/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | やや密 | 多量の黒色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 9 | 536 | 5075 2 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | やや密 | 白色・黒色粒子、小石（最大7mm） | 良好 | |

図 9-2　H 地区漆喰の床上層の土器(L534 一部)

| 番号 | ローカス番号 | バスケット番号 | 器種 | 色調 | | | 釉薬 | 胎土 | 粒子 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 内側 | 外側 | 断面 | | | | | |
| 1 | 534 | 5065 12 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 5YR7/4 | 5YR7/4 | | 黒色核(5B3/1) | 白色粒子 | 良好 | |
| 2 | 534 | 5065-17 | 貯蔵壺 | 5YR7/6 | 5YR7/4 | 5YR7/6 | | 黒色核(N4/0) | | 良好 | |
| 3 | 534 | 5065 2 | 貯蔵壺 | 7.5YR6/4 | 7.5YR7/4 | 10YR7/3 | | やや粗い | 1mm 程度の小石 | 良好 | |
| 4 | 534 | 5065 11 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | 黒色核(5B3/1) | 褐色粒子 | 良好 | |
| 5 | 534 | 5065 9 | 貯蔵壺 | 7.5YR7/4 | 7.5YR7/3 | 7.5YR8/1 | | 混和剤を含む | 微細な黒色粒子、小石 | 良好 | |
| 6 | 534 | 5065 8 | 貯蔵壺 | 7.5YR6/4 | 7.5YR7/4 | 7.5YR6/4 | | やや密、黒色核Ⅰ(10YR4/9) | 黒色粒子 | 良好 | |
| 7 | 534 | 5065-13 | 貯蔵壺 | 7.5YR8/6 | 5YR7/4 | 7.5YR7/4 | | 普通 | 白色粒子 | 良好 | |

った。しかし、上層から出土した土器から判断すると、これらは鉄器時代ⅡA期後半（前九世紀頃）[10]にあたると考えられる（図9）。

これほど良質の漆喰が広範囲にわたって敷き詰められているということは、これが上の町の大きな建物に隣接する庭であった可能性を示唆している。ただし、それが建物内部の中庭であったのか外部の庭であったのかは、この二グリッドの調査結果のみから判断することはできない。

第Ⅲ層

D10の東半分で漆喰の床を抜き、さらに掘り下げたところ、火で焼かれた赤茶色の柔らかい土の層に到達し、二つの壁（W555, W556）と一般に「タブン」と呼ばれる炉（L557）が検出された（図10、写真7）。

W555とW556は角度としては一つの部屋を形成しているように見えるが、角はまだ確認できておらず、基礎最下部のレベルも異なっている。これら二つの壁が交わっているのであれば角にあたる部分に炉（L557）があることになる。炉址は上部が丸く石で囲まれたもので壁の厚い頑丈な造りになっている。この地域の「タブン」の中ではかなり上質な炉だということができるであろう。周囲からは青銅器片やビーズ、炭化物も採集された。床に到達することは時間の関係上できなかったが、共伴する土器は鉄器時代Ⅰ期後半―ⅡA期前半（前一一―一〇世紀）のものである（図11）。また、採集した炭化物を放射性炭素年代測定法で測定したところ、紀元前一一八九～一〇二九年（前一二～一一世紀）という暦年較正年代が得られた[11]。樹種は特定できなかったが、針葉樹なので焼失した建材である可能性が高い。この建材の使用年数等を勘案すると、この層の年代は前一一―一〇世紀前半と考えるのが妥当であろう。

## 四、結論

今回の調査の成果をまとめると、以下の四点になる。

一、これまで上の町では、その東側を南北方向にまっすぐに走るケースメート式城壁が知られていたが、その角は確認されていなかった。しかし、今回上の町と下の町の境界部分に東西に走る壁が出土したことで、上の町を矩形に囲む周壁が存在したことが確認された。このことから、エン・ゲヴ遺跡が当時行政的性格をもった戦略的都市であった可能性が非常に高くなった[12]。

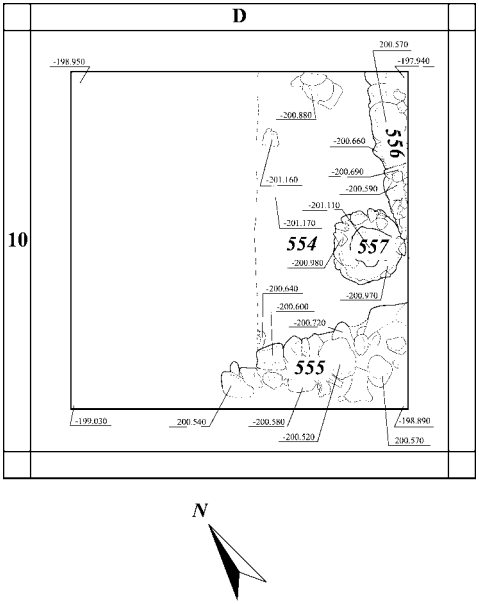



図10　D10 出土のタブンと壁

写真７　D10 で検出されたタブンと壁

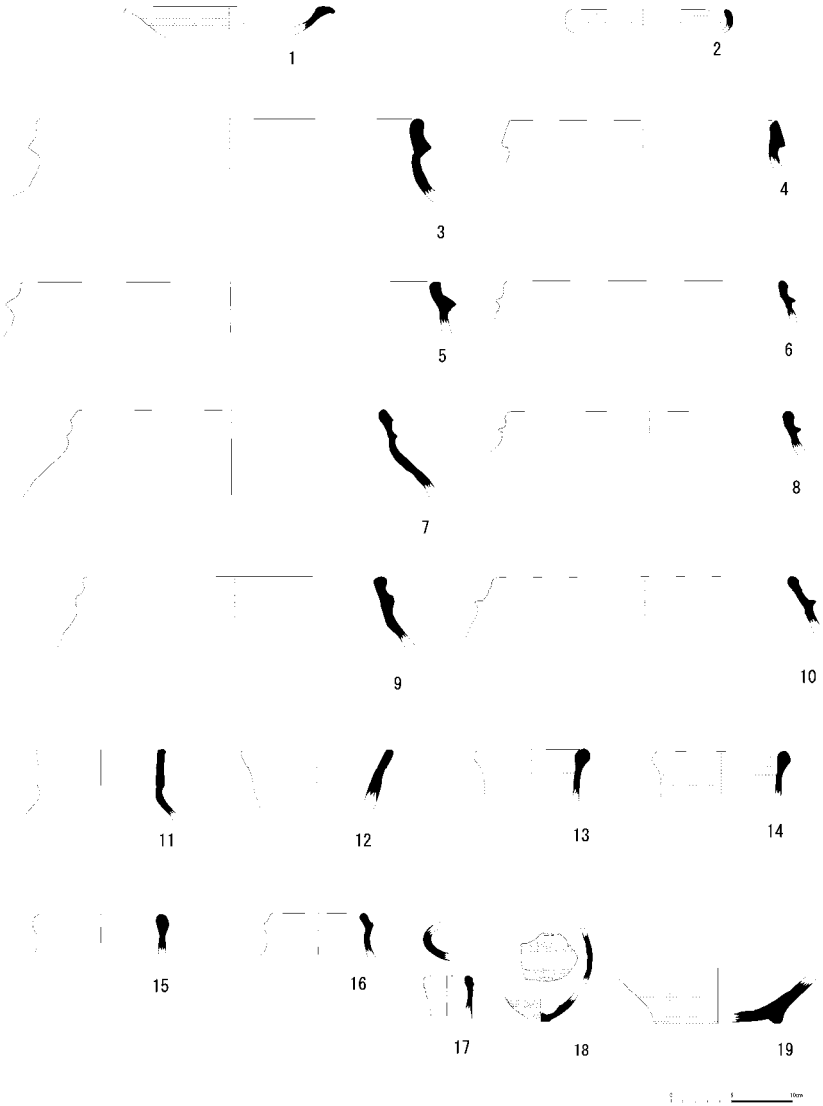



図11　タブン周辺（L554）出土の土器

図 11　タブン周辺の土器(L554)

| 番号 | ローカス番号 | バスケット番号 | 器種 | 色調 | | | 釉薬 | 胎土 | 粒子 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 内側 | 外側 | 断面 | | | | | |
| 1 | 554 | 5118 10 | 鉢 | 2.5YR5/4 | 2.5YR5/6 | 5YR7/4 | 内・外側 | 密、核(7.5YR5/1) | 白色・黒色粒子 | 普通 | |
| 2 | 554 | 5118 13 | 鉢 | 10R5/6 | 10R5/6 | 10YR8/4 | 内・外側 | 極めて密 | | 良好 | |
| 3 | 554 | 5118 6 | 調理鍋 | 5YR4/3 | 5YR4/3 | 5YR5/2 | | やや粗い | 1-3mm 大の白色粒子、砂粒 | 普通 | |
| 4 | 554 | 5122 2 | 調理鍋 | 10YR7/4 | 5YR6/6 | 10YR7/3 | | やや粗い | 白色・黒色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 5 | 554 | 5118 7 | 調理鍋 | 7.5YR4/2 | 5YR3/2 | 10YR7/3 | | 粗い | 多量の白色粒子、最大 7mm の砂粒 | 普通 | |
| 6 | 554 | 5118 9 | 調理鍋 | 2.5YR5/4 | 5YR4/3 | 5YR5/3 | | やや粗い | 多量の白色粒子 | 普通 | |
| 7 | 554 | 5118 5 | 調理鍋 | 2.5YR4/6 | 2.5YR5/4 | 2.5YR3/1 | | 粗い | 白色粒子、最大 6mm 大砂粒 | 普通 | |
| 8 | 554 | 5115 4 | 調理鍋 | 5YR4/4 | 5YR4/4 | 5YR5/1 | | やや粗い | 白色粒子、最大 6mm 大砂粒 | 普通 | |
| 9 | 554 | 5118 3 | 調理鍋 | 5YR5/4 | 5YR4/3 | 5YR5/3 | | やや粗い | 1-2mm 白色、褐色粒子 | 良好 | |
| 10 | 554 | 5118 4 | 調理鍋 | 5YR4/1 | 5YR4/2 | 5YR5/4 | | やや粗い | 白色、灰色粒子 | 普通 | |
| 11 | 554 | 5115 3 | 貯蔵壺 | 7.5YR6/4 | 5YR6/6 | 7.5YR6/3 | | 普通 | 多量の 1mm 大白色、黒褐色、灰色粒子 | 良好 | |
| 12 | 554 | 5122 1 | 水差し | 10YR7/3 | 10YR7/3 | 10YR6/3 | | 粗い | 白色、褐色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 13 | 554 | 5115 1 | 水差し | 2.5YR5/6 | 2.5YR4/8 | 5YR7/4 | 内側釉薬、外側筆で彩色 | やや粗い | 1-3mm 大の白色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 14 | 554 | 5115 2 | 水差し | 2.5YR5/6 | 2.5YR5/6 | 10YR7/3 | 内・外側 | やや粗い | 白色、黒色粒子、砂粒 | 良好 | |
| 15 | 554 | 5118 8 | 水差し | 2.5YR6/6 | 10YR8/3 | 2.5YR6/6 | | やや密 | 白色、褐色粒子、砂粒 | 良好 | |
| | | | | | 外上端 5YR7/4 | | | | | | |
| 16 | 554 | 5118 12 | 水差し | 2.5YR5/4 | 5YR5/4 | 5YR5/4 | | やや粗い | 1-3mm 大の白色粒子 | 良好 | |
| 17 | 554 | 5118 11 | 水差し | 5YR6/6 | 5YR6/6 | 5YR6/4 | | やや粗い | 白色、褐色、黒色粒子 | 良好 | |
| 18 | 554 | 5118 5/6 | 水差し | 10YR4/1 | 7.5YR5/4 | 7.5YR5/3 | | 密 | 白色粒子 | 良好 | ヤフーディヤ土器 |
| 19 | 554 | 5118 1/2 | 鉢 | 10YR7/4 | 5YR7/6 | 10YR7/3 | 外側 | やや粗い | 白色、黒色粒子 | 良好 | |

これと同様の矩形の行政区は、北イスラエル王国の首都サマリア、離宮イズレエル、南ユダの離宮ラマト・ラヘルなどで知られる他、新アッシリアや新ヒッタイト都市の宮殿建築にも見られる（杉本二〇〇九b参照）。

二、上の町を囲む壁の構造が詳細に確認された。残存状況も良く、珍しい例であり、今後こうした壁の工法の研究等に有意義だと考えられる。

三、上の町のもっとも高い地点（H地区）では、炉を持つ建物と漆喰敷きの床を持つ庭という、全く異なる性格の二つの遺構が鉄器時代に存在することがわかった。それぞれの年代は、土器から紀元前一一―一〇世紀頃と紀元前九世紀頃と考えられる。放射性炭素年代からも下の層（炉址）の年代は紀元前一一―一〇世紀と推定される。そうすると、これらの時代の間に都市計画や都市の住民が大きく変わった可能性があり、エン・ゲヴの成立期の歴史解明に大きな意味を持つと考えられる。聖書はダビデ時代（前一〇世紀）にこの地方にゲシュル王国が存在し、その後前九世紀にはアラム・ダマスカスとの戦いがあったことを記しているので、それと関係づけることができるかもしれない。しかし、現状ではまだ調査範囲も狭いので判断は保留したい。

四、G地区M18とH地区では、二〇〇四年までに判明していた以上に堅固なヘレニズム時代の遺構が発掘され、複数の層位が存在したことが確認された。おそらくヘレニズム時代のエン・ゲヴでは、少なくとも上の町の全体に居住が広まっていたものと考えられる。



## 参考文献


Arav, R. 2004 “Toward a Comprehensive History of Geshur,” Arav, R. and Freund, R. A.（eds.）*Bethsaida : A City by the North Shore of the Sea of Galilee*, Volume 3, Kirksville, 1–48.

Dion, P. E. 1995 “Aramaean Tribes and Nations of First-Millennium Western Asia,” Sasson, J. M.（ed.）*Civilizations of the Ancient Near East*, New York, 1281–1294.

Dothan, M. 1975 “Aphek on the Israel-Aram Border and Aphek of the Amorite Border,” *Eretz-Israel* 12, 63–65（Hebrew）.

Herr, R. 1988 “Tripartite Pillared Buildings and the Market Place in Iron Age Israel,” *BASOR* 272, 47–67

Kochavi, M. 1989 “The Land of Geshur Project : Regional Archaeology of the Southern Golan（1987–1988 Seasons）,” *Israel Exploration Journal* 39, 1–17.

Kochavi, M. 1991 “The Land of Geshur Project 1989–1990. Notes and News,” *Israel Exploration Journal* 41, 180–184.

Kochavi, M. 1992 “Rediscovered! The Land of Geshur,” *Biblical Archaeology Review* 18-4, 30–44, 84.
Kochavi, M. 1993 “The Land of Geshur Project, 1992,” *Israel Exploration Journal* 43, 185–190.
Kochavi, M. 1994 “The Land of Geshur Project, 1993,” *Israel Exploration Journal* 44, 136–141.
Mazar, A. 2005 “The Debate over the Chronology of the Iron Age in the Southern Levant,” in T. E. Levy, and T. Higham (eds.) *The Bible and Radiocarbon Dating*, London : Equinox, 15–30.
Mazar, B., Biran, A., Dothan, M. and Dunayevski, I. 1964 “Ein Gev Excavations in 1961,” *Israel Exploration Journal* 14, 1–33.
桑原久男　二〇〇九　「防御施設」月本昭男、長谷川修一、小野塚拓造（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告一九九八―二〇〇四』、一三―二〇頁。
杉本智俊　二〇〇五　「エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）の成立年代」『オリエント』四八―二号、一―二七頁。
杉本智俊　二〇〇八　『図説聖書考古学　旧約篇』河出書房新社。
杉本智俊　二〇〇九ａ　「鉄器時代の土器」月本昭男他（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告一九九八―二〇〇四』、二九―九〇頁。
杉本智俊　二〇〇九ｂ　「ゲシュル地方と新ヒッタイト文化」月本昭男他（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告一九九八―二〇〇四』、一九五―二三八頁。
月本昭男、長谷川修一、小野塚拓造（編）二〇〇九『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告一九九八―二〇〇四』リトン。
長谷川修一　二〇〇九　「アフェク（列王記上二〇章、下一三章）とエン・ゲヴの同定」月本昭男他（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告　一九九八―二〇〇四』、一八三―一九四頁。
山内紀嗣　二〇〇九　「ヘレニズム時代の遺構」月本昭男他（編）『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告　一九九八―二〇〇四』、一一一―一一八頁。

**註**

（1）町を囲む周壁の厳密な位置はまだ解明されていないので、正確な面積は現状では把握できない。
（2）Dothan（1975, 64）, Kochavi（1991, 181 ; 1992, 44）参照。長谷川（二〇〇九）は、別の可能性を主張しているが、積極的な証拠を示すことに成功していない。
（3）列柱式建物の機能については、Herr 1988 の議論と参考文献を参照。エン・ゲヴの建物の年代決定に関しては杉本（二〇〇五）参照。
（4）マザールらの調査の層位と日本の合同調査の層位の照合についても、まだ十分議論されていない。
（5）一グリッドは五メートル×五メートルである。ただし周囲に五〇センチずつ畔を残して調査を行うため、実際の発掘面積は四メートル×四メートルとなる。
（6）発掘調査において出土した遺構は、遺構の単位ごとにローカス（Locus）に分けられ、それぞれにローカス番

号がつけられる。例えば、複数の壁で囲まれた建築の場合、その内部に一つのローカスが与えられ、それを形成する各壁にもそれぞれ異なるローカスが付される。本文中においてローカスは「L＋3桁の数字」で示した。ただし、石組みの壁の場合には Wall の頭文字をとって「W＋3桁」の数字で示した。

（7）発掘当初このレンガ壁の幅は正確にとらえられなかったので、北側は一五センチほど掘り抜いてしまったが、その基礎からやはり南側同様の石積みの基礎部が検出されている。この基礎部の北端の上層でも壁に沿った漆喰の線が確認されているので、この壁は南北両側が漆喰で覆われていたことが確認された。

（8）これまでに判明しているヘレニズム時代の遺構に関しては山内（二〇〇九、一一一―一一八）参照。

（9）ただし、W505 と W508 は直線上にあるため、元来一つの壁としてあったものが後の時代の塔によって破壊され、W505 が再使用された可能性はある。

（10）土器編年に関しては、A・マザールのMCC「改訂伝統的編年」（A. Mazar 2005）に基づいている。

（11）測定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行なった。測定には 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用して AMS 測定法を用いた。放射性炭素の半減期には Libby の半減期 5568 年を使用し、暦年較正には Radiocarbon Calibration Program Rev 5.02（Copyright 1986-2005, Stuiver, M. and Reimer P.J.）を用いた。今回の暦年較正年代は測定資料から得られた補正年代 2910±30BP を基に計算したものである。

（12）この種の周壁を造るためには大規模な造成工事を必要とし、莫大な経費と労力がかかるので、綿密に考えられた都市計画を反映していると考えられる。